

かぐらおが

(題字は初代学長 山田守英氏)

第 69 号

平成 3 年 9 月 14 日

編集 旭川医科大学
 厚生補導委員会
 発行 旭川医科大学教務部学生課



(写真撮影 施設課 長島 章)

ツインハーブ橋

| | |
|--------------------------|--------------------------------------|
| 退官にあたって……………下田 晶久… 2 | 「手探り」からの脱出 —「起死回生」は成功したか…薄井 広樹…10 |
| 就任にあたって……………清水 哲也… 3 | 第38回北海道地区大学体育大会……………11 |
| 退官にあたって……………鯨島 夏樹… 4 | 第34回東日本医科学生総合体育大会(夏季)…11 |
| 自ら学ぶ……………東 匡伸… 5 | 全医体の成績結果……………12 |
| 病院長に就任して……………水戸 廸郎… 6 | 課外活動短信……………12 |
| 着任にあたって……………山内 一也… 7 | 納付済みの授業料の還付について……………12 |
| 助教授就任にあたって……………松尾 忍… 8 | 学年担当教官の変更について……………12 |
| 講師就任にあたって……………高草木 薫… 8 | 特別実習「救急蘇生」実施される……………12 |
| 南→北、東→西、今→!? | 卒業生の動向……………13 |
| —入学して思っていること—…浜田 賢治… 9 | 安全運転の徹底について……………14 |
| 旭川医科大学に入学して……………角谷 諭美… 9 | 教官の異動……………14 |
| 第17回医大祭終わる テーマ「起死回生」…10 | 窓 外……………千葉 茂…14 |



退官にあたって

第三代学長 下田 晶久

昭和62年7月1日から平成3年6月30日までの4年間にわたる学長の任期を終えて、このたび退官させて頂くことになりました。長くも短くも感じられる4年間を振り返る時、何よりも先ず安孫子、鮫島両副学長を始めとする教職員各位の温かい御支援と学生諸君の協力を深く感謝申し上げます。やがて創立20周年を迎えようとしている旭川医科大学に起こったこの期間の出来事を思い起こしてみますと、創設期から労苦を分かち合って戴いた5名の教授の方々が定年により本学を去られた一方でそれぞれに新進気鋭の後継者を迎え入れる事が出来たこと、入学定員が当初の100名に復帰したこと、カリキュラムの大幅な見直しが行われたこと、国立大学全体の入試改革への対応、さらには病院の医療情報システムや図書館の学術情報システムの導入などが浮かんで来ます。これらの目に見える変化の陰に隠れた最大の試練は、強まった国の財政緊縮の直接的な波及を如何にして緩和し本学の活性を維持するかにありました。その為には全学の協調体制が前提となりますが、前述の主な変革はそれが成し遂げられた事自体この全学的な協調が立派に保たれた結果である点を改めて銘記したいと思います。

国の財政を預かる政府の立場では、予算の効率的な運用を図ろうとするのは当然と考えられますが、それが大学の相対評価に基づく重点配分へと傾斜する危険性は常時意識に留めておかなければなりません。ここで問題となるのは教育・研究を第一の使命とする大学の効率とは何か？ またこれを計る正しい物差しを設定し得るか？ があります。医科大学の場合にはこれに加えて診療の成果もまた評価の対象となります。しかも診療評価は多角的に為されなければなりません。その中には指数化される要素をも数多く含んでいる為、むしろ第三者からはこの指数のみから安易に評価し勝ちな面があります。これが医科大学全体の評価に繋がる可能性も否定し得ないと思えば、現実を直視した全学的配慮が望まれます。同じことは指数化され易い留年率や国家試験合格率についても言えるのであって、母校の発展が即各自の将来に大きく影響する学生諸君にも奮起を促したいと思います。

甚だ現実的な話題を取り上げてしまいましたが、既に新設医大の時期を過ぎそれぞれに十分な成果の蓄積が為された本学の全体像に触れる機会を与えられた4年間を顧みて、今後の本学の発展には一層の協調に基づく折々の自己点検が望まれ、さらにその成果の積極的な発言が必要となるであろうとの現在の感想を率直に述べさせて

戴きました。この点では「桃李言わずとも下自ずから蹊をなす」と言った価値観に育った年代の一人として、少なくとも一般社会への情報提供に欠ける処は無かったかと深く反省しております。

機会を与えて戴いた7月3日の退官記念講演の折に述べた事柄をもう一度繰り返す事になりますが、自然環境が人間形成に与える影響は決して小さくはないと信じます。大雪・十勝の雄大な山並みを朝な夕なに仰ぎ見るキャンパスには、一年を通じて常に鮮やかな季節感が張り、ともすれば忘れがちな大自然との対話を思い起こさせてくれます。多感な青年期の6年間をこの恵まれた環境の中で過ごした卒業生諸君の間に自ずと培われるであろう気風が、やがては凝結して気宇壮大な学風となる日の訪れることを夢見ております。最後に旭川医科大学の限り無い発展と皆様方の御健勝を祈念してお別れの言葉と致します。



退官記念講演



退庁式



就任にあたって

学長 清水 哲也

下田品久前学長ご退官の後を受けて、この度、学長に就任することになりました。三代に互る学長先生が「大学人」の象徴ともいふべき立派な方ばかりでありますので、その責の重さをひしひしと感じております。もとより微力ではありますが皆様のご支援をいただきましてこの重責を果たしたいと念願いたしております。

今、「大学」はまさに明治維新にも似た平成維新ともいふべき「教育革命」のさなかにあるといっても過言ではありません。

文部大臣の諮問機関であります大学審議会は三次に亘って答申を行っております。

本答申を仔細に検討してみますと、もっとも身近なものとして昭和62年10月29日、文部大臣から「大学等における教育研究の高度化、個性化および活性化等のための具体的方策について」の諮問を受けての答申、「平成5年度以降の高等教育の計画的整備について」のなかで下記の3点が特筆されます。

○各大学等が自由で多様な発展を遂げ得るよう、大学等における教育の基本的枠組を定めている大学設置基準等の諸基準を大綱化すること。

○各大学等が自らの責任において教育研究の不断の改善を図ることを促すための自己点検・評価のシステムを導入すること。

○大学等の生涯学習に果たす役割の増大に伴い、大学等における教育へのアクセスの多様化や授業の履修形態の柔軟化を図るなど、多様な学習機会の提供に努めること。

つまりは従来のような国立大学にややもすると見受けられがちな「親方日の丸」的な考え方を完全に否定して、「各大学は自己評価、自己点検を強化して、各大学の特色を出しなさい」、「自助努力をしなさい」というもので、民間資金の導入による寄附講座なども既に他の国立大学で実現をみておりますし、本学でも下田前学長のご努力により民間資金導入による寄附講座等に関する諸規程案が制定され、教授会の承認が得られております。事実、東大医学部附属医用電子研究施設の臨床医学電子部門や滋賀医大では運用が開始されておりますし、続々と各国立大学で実現化の趨勢にあります。国からの公的助成の促進と同時にこのような側面からの具体的ストラテジー推進も軽視できない自助努力の1つといえましょう。また大学審議会の答申の重要な柱として学部、大学院を通しての国際交流の積極的な展開を挙げております。

○グローバル化の進展により、我が国の社会は、経済、文化さらに日常生活に至るあらゆる分野において諸外国との交流を前提に成立する社会となってきてお

り、高等教育も例外ではない。

○大学院における留学生の教育体制の整備

いまや留学生の受入れ体制の整備は大学院の整備充実の重要な課題になっている。

留学生の受入れの推進に当たっては、我が国の大学院教育全体の改善を図り、大学院を国際的な高い水準の教育研究を行う機関として、事前の準備を含む留学生に配慮した教官体制の整備を図る。

この大学における国際交流に関する推進で想い出されるのが、遼寧省（瀋陽市）にある中国医科大学からの留学生馮戈女医の留学についてのエピソードであります。

中国医大には優秀な医学生を选拔して、英語と日本語で医学教育を行うコースがありますが、「英語コースを終えた卒業生は米国を中心とした英語圏諸国へ留学する機会に恵まれているのですが、日本語コース修了者の日本留学の機会がほとんどないために、中央政府からの財政援助打切りの危機的状況にある、何とかとりあえず2名の日本語コース修了者を旭川医大へ招聘して頂けないか」との依頼が、旧知の中国医大景陽教授からありました。私は取り敢えず1名、3ヶ月間なら何とか考えた考え、旭川市の坂東市長と当時の旭川市医師会長原田一民先生を訪ねてご相談申し上げたところ、全面的なご協力をお約束頂き、市民の募金運動のかたちで、報道機関の協力を得て馮戈女医の留学が実現しました。

その後、市民運動による留学生支援の快挙は「日中医学協会」を動かし、同協会の石館理事長がこの実績をもとにして、笹川財団より資金援助を得、お蔭さまで千立志君は快適に1年間の留学生生活を終えることが出来ました。

市民運動が日中医学協会の支援を引き出すことが出来た、これも国際交流における自助努力の1つといえなくもありません。このため中国医大は政府からの日本語コースの財政支援を打切られないですんだとうかがって、ほっと胸をなでおろしたものでした。

前記したように、今、全国の大学、なかんずく国立大学は未曾有の転換期に立っているといっても過言ではありません。

この時に当り、留意すべきは、拙速に走らず、各局部、各教官の皆さんと対話を充分に重ね、理想は高く掲げてもそれが砂上の楼閣にならぬよう、現実を踏まえて、教育に係る諸問題の対処に際しても、よき父親、よき児童でありたいと願っております。

皆様の方強いご支援を重ねてお願いして就任のことばとさせていただきます。



退官にあたって

第三代病院長 鮫島夏樹

旭川医大在職中の18年間を振り返って見ますと、医学教育の面ではプライマリーケアや卒前臨床実習、卒後の臨床研修の問題など、医療の面では分子生物学の発展、人工臓器の進歩、臓器移植に関連しての脳死問題などがすぐ思い浮かべられる事柄です。これらを念頭におきながら、2、3の感想を述べたいと存じます。

科学技術の急速な進歩と共に、今後、医療技術の発達にも一層の拍車がかかることと思われます。現在、我国の大学病院で行なわれている最先端の医療と見做されている所謂、高度先進医療なるものは、人工臓器、アイソトープや分子生物学の応用など、何れも科学技術の医療への応用であることが目立ちます。臓器移植を始めとして、主に外科手術手技の進歩に依存する bench surgery、脳外科や口腔外科領域でのマイクロサージャリー的、形成外科的、或は血管外科的手技の応用でも普く新しい科学技術、機械器具の開発に基づくことが明らかです。Surgeryの語源が意味する素朴な手の操作による医療である外科では、技術的には現在ほぼ頂点に達し、今後発展が期待されるとすれば、主に新たな科学機械、器具の開発に依存するであろうことが示唆されます。

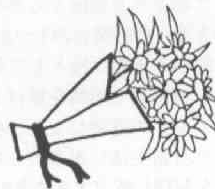
このような科学技術の応用による医療技術の進歩によって、医学が人間の生命を昔よりも延長させることが可能になりますと、健康や疾病に対する現代人の考え方や価値観、ひいては死生観や人間の生き方などが少しずつ変わって行くのを感じざるを得ません。疾病観について見ますと、WHOの健康の定義は非現実的の様に思われ、むしろ、健康とか疾病とかは、その個人が環境からの刺激にうまく応答出来るか、出来ないかによる、と考えた方が妥当であると思われませんが、不幸にして前述の様な医学、医療の発達に関するマスコミの過大な宣伝は、人々に誤った健康観を植えつけ、身体に生じた不都合は医療の進歩で治せると考えさせる様になりました。西欧的合理主義は契約社会の風潮を持ち込み、患者の権利が強調されて医療も1つの契約の様になりました。当然のこととしてインフォームドコンセントが盛んに云々される様になり、時にはあたかも医師の責任逃れの様になる一方で、ピポクラテスの精神である人間愛や朱子学の「医は仁術」の精神は覆い隠された観があります。これらは余りにも言い習わされたことではありますが医者としての必須の資質であり、反面、最も教育し難い資質でありましょう。かかる本質的な資質の涵養は子供の時からの長期間の教育が必要であると思われませんが、現代の偏差値

偏重教育では最も軽視されて来た観があります。このような教育は又、普く一般教養と密接な関係があると考えられますが、今後とも6年間の医学教育の中で、如何にしてこれを体得せしめるかが課題でありましょう。

今日、大学教育をめぐって新たに一般教育(教養学部)のあり方が問題になっているかに見えますが、性急に官主導型に堕ち入るよりも各大学が自主的に解決して行くべき事柄でありましょう。この点に関して、本学が従来からの医学教育に、旧来の総合大学になかった新しいカリキュラムを生み出し、それが1つのモデルになったことを考えると、単科大学としての旭川医大の果たした役割は決して過少評価されるべきではなく、創設当時の山田学長初め初代の教官の方々の卓識によるものと自負すべきものと考えます。願わくば今後ともその良い面を育て更に発展させて戴きたいと思うものであります。組織面でも機器センターなどに見られる共同研究施設は旧来の大学にない良さを持ち、他大学の見学者を羨望させました。

顧みますと、本学は大学法案に続いて昭和48年10月に変則的に開学して以来、活発な成長期を歩んでまいりましたが、開学以来18年間の歴史の中で間接的ながら重要な影響が予想されるものは入試制度改革でありましょう。私の個人的見解ではこの制度の意義を余り認めることは出来ず、むしろ日本の大学制度に損失を与えたのではないかと考えております。それによって生れた結果は、向上しなければならぬ人間の性質に不利に働く環境を造ったとしか考えようがありません。何事にも画一的なものからは、刺激は生れ難いと思うからです。

本学は今日まで新鮮な創学の意欲に支えられて、順調に成長し、今や全国で活躍する卒業生は1,300名を超え、まさに青年期を迎えたと云っても過言ではありません。この度、18年間お世話になった旭川医大を去るに当り、本学が常に進歩を求める挑戦心を失わずに、今後さらに大きく飛躍することを希うものであります。





自ら学ぶ

副学長 東 匡 伸

この8月1日付で、教育研究及び厚生補導担当副学長を拝命した。長たらしい名前であるが、これ程仕事の内容そのものを表現した職名はないであろう。医科大学の使命は、教育—社会に貢献し得る医師、研究者を育成すること、研究—医学、延いては広く自然科学、社会科学、人文科学の発展に寄与する研究を行うこと、診療—病める人を癒す医療を行いその発展に尽すこと、の三本柱にあることは言を俟たない。この三本柱は別々のものではなく、お互いに補強し合うもの、鼎足の関係にあることも、今更論じるまでもないことである。この医科大学にあって、学長を補佐し、如何により良い方向へ教育、研究及び厚生補導面の舵を取るか、責務の重さを痛感する。

時同じくして、大学審議会は、大学および大学院の在るべき方向付けの改革を答申した。旭川医科大学はその答申内容の大半を先取りして、創設以来逐年実行してきた。しかし、17年を過ぎ、積年の問題点、矛盾点も浮き上がってきている。大学人諸氏、及び外から大学に関係される方々の御協力を得て、在任中に出来得るところから、ひとつひとつ改善し、解決し、旭川医科大学の発展に尽したい。

教育。まず学生諸君への言葉から始めたい。学生諸君には、active に“自ら学ぶ”ことを心から願いたい。passive な学習には発展がない。単に講義・実習をpassive に受けるのではなく、そこに疑問点を見出し、教官に問うなり、図書館で調べるなり — 例えば、図書館の入口近くに置いてある和雑誌特集記事索引から、知りたい事項の最近の見聞を載せた和雑誌を見出し得るはずである — 自ら行動することにより、学習意欲が湧き、学ぶことの面白さが生まれる。無知から疑問は生まれない。講義・実習の内から、更に参考書、学術雑誌を繙くことから、疑問“なぜ”が生まれ、学ぶことの面白さが生まれる。学生諸君が言う“つまらない”講義も、諸君がつまらないと覚えた時には、自ら学ぶ心が失われた時であり、そこにはpassive にしか物事を受け取ろうとしない甘えがある。学ぶことは面白くなければならないと諸君は言う。勿論である。しかし、“面白い”ということに、諸君は誤った解釈をしている。面白く教えてもらって学ぶ!? 冗談では無い! テレビ時代、漫画時代の悪影響であろうか? 先人が刻苦し、知り得た自然の理を、面白おかしく教えてもらおうとは言語道断である。先人が苦しみ知り得た自然の理に、苦しみを覚え、自ら苦しんで学ぶことなくして、自然の理を本当に理解できようか?

自然の理を探究できようか? 現代の甘えの構図が、そのまま大学に持ち込まれていることに、唯々慨嘆している1人である。“自ら学ぶ”大学人の当然為すべき姿に、より良い方向を与え、より高い思考力を育成することに、微力ながら努力を傾けたい。

研究。旭川医科大学の研究スタッフ数、研究システム、研究設備が十分であるとは、誰しも考えてはいないであろう。大学院の機構、国際交流のより一層の活性化方策を含めて、問題は山積している。清水新学長も、これらの問題解決に意欲を示された。勿論一朝一夕に行えるものではなく、学内の一致した協力のもとに、ひとつひとつ解決して行かなければならない。

ここで、若手研究者に、研究態度について一言述べたい。自然現象の理を明らかにする方法論が多様であることは論を俟たないが、最近、現象のみを捉えることに満足し、その先へ進もうとしない研究態度に、私は危惧の念を感じる1人である。現象の集積から更に一歩足を踏み出し、“なぜ”その現象が起こるのか、そのからくりはどうなっているのかを明らかにする努力を避けては、研究の発展はない。勿論、研究対象、研究テーマによっては、その方向付けが難しいこともある。また現象の集積が重要な研究の基礎であることも承知している。しかし、旭川医科大学の若手研究者には、現象論にとどまらず、からくり論を志向する研究態度に徹してもらいたいと願うのは、私1人ではないと思う。旭川医科大学における研究の大きいなる発展のために!

厚生補導。大学人としての学生諸君の日常の生活態度に、ここで口を差し挟むつもりはない。創設以来、学年担当制が採られて、諸先生が学生諸君の相談相手となっており、また保健管理センターも充実している。ここで気になるのは、当然学年担当の先生と十分相談し合う必要があると思われる学生諸君が、学年担当の先生に近寄らない矛盾した傾向があることである。学年担当の諸先生が担当だからといって、100余名の学生諸君1人1人に常に接触することは、出来ない相談である。これをカバーするのは、学生諸君の他への無関心を排除することにあると思う。諸君がお互いに友人として助言し合い、躊躇することなく、諸先生と密に接触することを願いたい。諸先生の室のドアは開かれている!

副学長1年生として、“自ら学び”、“疑問を持ち”、その問題解決に努力したいと、“意欲”をもちはじめた昨今である。



病院長に就任して

東 洋 大 学 医 学 部

副学長 水戸 廸 郎

旭川医科大学附属病院は、今年で開設15周年を迎える。区切りのよい年は普通なら、何周年記念と、はでやかに、ほこらしく祝うのが通例である。私も人並みに胸に花リボンを付けて、病院長なる肩書きで祝辞などを述べてみたい。何時かはそんな機会もめぐってくるかも知れないと思っていた。

漠たる思いが8月1日で現実のものとなった。清水学長の推薦と教授会の信任投票の結果、鮫島前病院長の後任として、副学長兼病院長の肩書きが就任挨拶回りの名刺に刷り込まれた。

旭川市内の関連病院や看護学校、札幌市内の関係各所に挨拶回りに訪れるたびに、就任のお祝い言葉はなく、“ご苦労さんですな”という励ましが、さげた頭が元に戻らぬうちにかえってくる。

全国的な看護婦不足、ゆたかな社会での職業観の変化、時流と言えればそれまでであるが医師、パラメディカル、職員にも及んだ変化は、旭川医科大学附属病院の現在の厳しき状況に大きく作用したことは、否めない事実である。

その厳しさを認識した上での就任であり、私なりに相当の覚悟はあったはずであるが、念を押されるように“大変ですな”などと言われると折角の変革、改善に強いて意欲をふるいたたせていた出鼻をくじかれ、辞令受領後、1ヶ月をたたずして、意気消沈気味となる。

今、改めて、大学医学部附属病院の存在意義などを論ずるつもりはないが、一般病院と異なる点といえば、研究に裏付けされた高度の医療の実践の場であり、次の時

代に向けた新しい医療の開発の場でもある。同時に医師、医学生、看護婦や看護学生の教育の場である点であろう。しかし、他病院と変わらぬ一般の医療の現場であることも忘れてはならないであろう。

病院職員に就任の挨拶にあたり、私は、大学附属病院であっても、当然のことながら現在の日本の医療制度、保険制度の枠外にあるものではないこと、したがって、親方日の丸的な病院運営では事態は悪化の一途であること、企業の経営理念を病院運営にも導入せざるを得ないこと、そして、多才な個人が自分のパートに責任と志、あるいは誇りを持ち、力を十分発揮することで全体がよいハーモニーになる。指揮者、院長1人が強引に操縦しようとしても、ピエロにすぎなくなる。職員の1人1人が自分の仕事を天職と心得ていただき、個々の仕事に誇りを持てる環境整備と調整することが病院長の役割と考え努力したいと述べた。

世界のホンダの創設者、本田宗一郎をいたむ新聞の投書欄にこんな文があった。ある社員が“素晴らしい社長のもと、会社のため全力を挙げて働きます”とある会への礼状を出したところ、返礼状の中に“会社のためじゃない。自分のために働け”と書かれていたと言う。

多才な個人がおのおのの仕事を誇れるようになれば、5年先の開院20周年を世間並みに全職員が花リボンをつけて祝えるのではないのでしょうか。

その出発点が今だと心得、旭川医大に在籍される皆様
の努力と協力を切望するものです。





着任にあたって

数学教授 山内 一也

本年3月をもって定年退官された安田教授の後任として、4月1日付で数学教室に着任致しました。前任地は鹿児島大学教養部数学教室です。旭川医科大学の開学が昭和48年だそうですが、丁度その年に北大の大学院生から鹿児島大学の講師として赴任致しました。以来18年間鹿児島の地で過しました。赴任初日の翌朝、大学講内の宿泊所の窓から外を見ると男子学生が傘をさして歩いているのが見えました。男子学生が日傘をさす程の暑い南国に来てしまったのだと驚きましたが、実は桜島の降灰のせいだと知り、少し安心すると同時に灰の凄さにビックリしたのも今は懐かしい思い出です。

鹿児島大学では教養部に所属しておりましたので一般教育には関心を持ち続けています。現在、教養部の存続、一般教育の見直し等が社会的にも問題にされていますが、一般教育とは何か？その定義が各教官によって様々であり、大学としても、新制大学発足の目玉が一般教育であったにもかかわらず、その辺を曖昧にしたままで現在に到ったこと、またその事からの当然の帰結かも知れませんが一般教育を大学に定着させるための真の努力がなされなかったこと等々が現在の事態を招いたのであろうと思っています。複数学部を持つ大学では一般教育は少数の教官が大量の学生を教育するというのを大きな特徴としています。従って担当教官は教育に相当のエネルギーを割かなければなりません教育に使った努力が必ずしも評価の対象とならないのがもう1つの特徴のように思います（例えば人事等るとき研究実績が評価の対象となり教育実績はほとんど問題とされないようです）。幸い旭川医大は学生数も少なく、大学としても一般教育を医学教育の一つの柱として位置づけているようですし、一般教育を担当されている先生方も教育に熱心であるように見受けられます。一般教育としての数学教育は如何にあるべきか？悩み続けている問題です。鹿児島では文系、農水系、理工系の3つの系に分けて行なっていました（医学部は理工系に入っていました）。旭川医大は単科大学ですのでそれに相応しい内容及びやり方があるはずで安田先生もこれまで随分努力されてきたものと思います。この伝統を受け継ぎ更に深化発展させていきたいと思っています。

研究分野は大きく言えば幾何学ですが、その中でも微分幾何学と呼ばれる分野に属しています。微分幾何学は大雑把に言えば曲った空間（これをRiemann空間と言います）を取り扱う分野です。一次元では曲線、二次元で

は曲面等々です。

さて2点間を結ぶ最短線は、平面上では直線になりますが、例えば地球のような球面では北極と南極を結ぶ最短線は直線ではありません。Riemann空間における最短線を測地線といいます。空間の中の1つの三角形にいろいろな方向から光を当てると床にいろいろな形の三角形の影が出来ます（これを三角形の射影変換と言います）影となる三角形はいろいろな形に変形しますが緑である直線は直線に射影されています。すなわち直線は射影変換によって不変です。そこでRiemann空間において測地線を不変に保つような変換を射影変換と言います。小生の当面の目標はこの射影変換を許容するRiemann空間を決定することにあります。多分このような空間は球面しかないであろうと予想されており各国の微分幾何学者が取り組んでいます。若干の仮定をすると、この予想が肯定的に解けることを証明する事が出来ました。目下この仮定を除くべく日夜悪戦苦闘しています。そのためにはこれまでの手法以外に更に新しい手法が必要であると考え、現在Finsler幾何学（安田先生が研究されていた分野）にも手を延ばし始めています。話しが少し堅くなりましたので研究の話はこれ位にしましょう。

鹿児島では「薩摩芋」を薩摩芋とは言いません。唐の国から伝わったからでしょうか、唐芋と言っています。この唐芋から作ったのが鹿児島の焼酎です。鹿児島に行かれて御存知の方も多と思いますが鹿児島ではほとんど日本酒を飲みません。赴任してすぐの頃ですが先輩に次のように言われました。「日本酒飲むと内臓やられる、焼酎飲むと頭やられる、どちらを選ぶかは君の自由であるが…」18年間焼酎に漬ってききましたので相当やられているものと思っていますが、幸いここは医科大学ですので「飲むな」という以外の適切な助言が心ある方より得られるものと思っています。北海道の新鮮な魚貝類は酒の肴に最適ですが、先日医大の釣同好会「海溪会」に同行する機会に恵まれサロマ湖にカレイ釣りに行って来ました。鹿児島では鯛、鯉等を釣っていましたがカレイ釣りは初めてで少々不安だったのですが、小ぶりながらもクーラー一杯の釣果でした。魚影も北海道の方がはるかに濃いようです。この恵まれた自然環境の下で研究、教育に励みたいと思っています。

助教授就任にあたって

■ 皮膚科学講座 ■

松尾 忍



このたび4月1日付で就任致しました。当教室の助教授は水元俊裕先生、大熊憲崇先生に次いで私で3代目となります。何卒宜しくお願い致します。

私は昭和54年に一期生として本学を卒業後、本学の皮膚科学教室に入局し現在に至っております。私は元来旭川出身ですので、違和感も無く本学で卒業研修を行なおうと考えておりました。その中で皮膚科学を選んだ理由は自身の皮膚科学に対する興味もさることながら、それ以上に先代教授である大河原章先生を始めとした諸先輩の先生方の魅力と、医局の雰囲気に魅了されたことが大きかったと思います。その当時ほどの医局でもほぼ同様の状況だったと思いますが、皮膚科学教室もやはり少人数でしかも年齢差も少なかったためか、家族的で自由あふれる雰囲気が肌に合ったのだと思います。

入局して暫くしてから与えられた研究テーマは、表皮細胞におけるライソゾーム酵素活性の測定とその変動を様々な皮膚疾患で検討するというものでした。皮膚という臓器はとかく単純な臓器と考えられがちですが、実は表皮(角化細胞)、真皮、皮膚付属器(毛、汗腺等)といった多種多様の器官の複合体で、また表皮細胞だけを

みても“角化”という特異な細胞分化が見られます。この多様な機能を持つ皮膚という臓器を研究対象にする難しさを、この時に強く思い知らされました。その後もブタおよびヒト表皮における superoxide dismutase(SOD)、Ca⁺⁺-activated neutral protease(CANP) 活性の存在証明ならびに性状の検討等、主に生化学的な方面での仕事に携わってきました。昭和59年には幸いにも留学の機会を与えられ、約2年間マイアミ大学で研究に従事しました。留学中はそれまでと違い、当時皮膚科領域でも盛んに行なわれつつあった hybridoma 法を用いて単クローン抗体の作製に従事しました。主に病理組織診断の助けとするために、血管内皮細胞、エクリン汗腺、表皮基底膜、腎細胞癌等に対する単クローン抗体を作製し、幾つか実用可能な抗体を得ることが出来ました。その時の上司である Penneys 教授は皮膚科における病理組織学者でしたので、彼が毎日200枚程度診るプレパラートを研究の傍ら見学させていただき、この時の経験がその後現在も持ち続けている histopathology への興味のきっかけであった様に思います。

皮膚科学教室も今年で開講15周年を迎えようとしています。私が入局した頃に比べると医局員が増えたのはもちろん、様々な分野で技術を身につけた後輩の活躍で研究の範囲が徐々に広がってきています。今後も当教室の一貫したテーマである尋常性乾癬の病態解明を中心として、より発展させるべく努力する所存ですので御発言頂ければ幸いです。

講師就任にあたって

■ 生理学第二講座 ■

高草木 薫



講師を任せられたことで学生に講義をすることが私の仕事の中で非常に大きな位置を占めることになりました。顧りみますと私は医学部の講義を受けたことによってかなりの影響を受けた者の一人と

思います。その中で私が最も感銘を受けた講義は先日本学を退官なされた前学長の下田教授の病理学講義でした。下田教授の講義を通して私が学んだものは病理学というよりはむしろ首尾一貫した医学に対する畏怖と教授の病理診断に対する深い執念であった様な気がします。そして講義を聴く度に自分の中には存在していなかった新たな感動が生じたことを今でも鮮明に覚えています。その感動が当時の私に本当の意味での医学に対する興味を抱かせたような気がします。

私は卒業後臨床医学に進むのが当然と思っておりました。しかしながら臨床医学を志す上で或は患者さんと接する上で自分自身の考え方の柱を持ちたいと思っておりましたので、まず基礎医学系の大学院(生理学第二講座)に進むことにしました。そして7年間(大学院の4年間

に加え、さらに予期しなかった3年間)も生理学を続けることになってしまいましたが、この間、森教授から学んだことは、生理学と人間学を含めた医学総論です。この総論で学んだことは新たな価値観を得るためには極めて柔軟な発想が必要であり、その価値観を自分のそれと照らし合わせながら自分の思考過程を再構成することが極めて重要であるということ、そして既成概念に対して常に問題意識を持つことの大切さであります。

最近、人間社会の構造が即物的になってきている様な気がします。流行を追うあまり、結果・利益を安易に求める傾向を感じます。結果や利益を得ることが社会繁栄の基本であることは否めませんが、問題はその過程と副産物であり、これらは確実に時間差をもって社会に裁定を下してきています。最近のバブル或はファジーという言葉はある意味で現在の社会を強烈に皮肉っているような気がしてなりません。価値観や流行がどんどんと変化してゆく状況の中で、じっくりと腰を据えて自らの成すべきことに取り組む姿勢、そして心を落ち着かせることの出来る時間と空間を作ることの重要性を痛感しております。

学生時代、大学院時代、そして最近よく考えていること、これらを総括するとこれから自らの成すべきことが見えてきます。生理学の講義、或は研究においても常に本音でかつ真剣に取り組む姿勢を忘れずにありたいと思っております。

南→北、東→西、今→!? —入学して思っていること—

第一学年 浜田 賢治

受験に来た頃を思い出す。まだ冬の只中だった。国際線でもあるまいに4時間近くもジェット機に閉じ込められて、やっとこさ着いた先は、まさしく雪の国。雪しかない。沖縄から来たのは、偏西風ならぬ偏差値に吹き飛ばされてのこと。極めて単純明解。しかし、それでも北の大地への憧れはもとよりあったのだ。

物価は沖縄より安いし、人情もあるし、言葉も通じるし(失礼。しかしアイヌ語はまったくダメなので悪しからず)、新生活の出発はまずまず、と思っている。ただ「朝」が早過ぎる。夜が白むのは4時以降にしてほしい。カッコウもカラスも鳴く時間を考えてくれ。朝寝坊のウグイスと長年つき合ってきた身には応えるのだ。最南端の県から最北の医学部に来たのだから、文句をいわせたらキリがない。そのうえ社会人だったギャップもある。いまでもスーパー・マーケットの雑踏のほうが心が落ち着く。子供がいて、母親がいて、年寄りがいて、そんな実社会に比べると大学内はいかにも殺風景である。

そもそも「西洋医学を勉強したい。学問をやるのに年齢は関係ないはず」それだけが支えだった。日ごろの鍼

灸の実践のなかで自然に芽生えてきた感情であり、海外救援ボランティアのなかでつかんだ教訓でもある。リュックのなかに針と灸と薬草を詰め込んでジャングルの中を歩いていく自分の姿、それを怠惰な心を打つ励みにしている。東洋にもいいところはあるし、ましてわれわれは東洋人であるし、西洋のいいところを取り入れていけばいい、簡単な道理であろう。患者さんが楽になるのに、東洋医学も西洋医学もない。ただ自分自身は東洋医学によってオリエンテーションがすでになされてしまっているから、これからは謙虚にそしてアグレッシブに旭医で学んでいきたいと思う。

私にしてみれば、親を選べないのと同じくらい、入れる大学を選べないという覚悟があったから、「入学を許可します」といわれた下田学長の言葉には感極まってしまった。貴重な時間(=生命)の浪費である受験勉強に終止符を打ってくれた旭医に、素直に有り難く思う。問題は、この旭医との出会いをどれだけ意味あるものにするか、ということだろう。

東西南北のフロンティアをぶらぶらする渡り鳥のこの身からいえることは、「今が大切」ということ。いつも「今」を原点にうろつくしかない。過去は死んだ「今」だし、未来はわかりようもない。「生命」は現在にのみ開花する。「今」をじっくりと味わいたい。

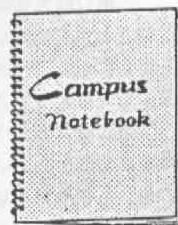
旭川医科大学に入学して

第一学年 角谷 論美

旭川で1人暮らしを始めてから、早いものでもう半年が過ぎようとしています。振り返ると全てが初めて体験する事ばかりで、振り回されっ放しの半年間でした。その大学生活の中でまず私が感じたことは、自分の未熟さです。高校の同級生達は、まだあまり将来の事を考えていなかったようで、成績で大学を選んで進学していった人が多かったのですが、私はかなり前に医者になることを決意し、この大学に入学しました。そのせいで、正直に言えば、自分は意志の強い人間であるかのような錯覚をして、少しうぬぼれていた所がありました。しかし、大学で知り合った人々と話すうちに、私にはまだまだ甘えがあり、考え方も幼いということを感じました。考えてみれば、高校まではある程度同じ環境で育った人達としかつきあいがなかったのに、日本全国から集まった、しかも年齢も様々な人達の中に突然放り込まれたのですから、年下でしかも両親に甘やかされて育ってきた私が一番人生経験が少なく、未熟であるというのも当然です。せっかくこれだけ周りに素晴らしい考え方を持った友人が大勢いるのですから、良いと思った所はどんどん吸収して、少しずつでも成長していきたいと思っています。

先日、高校の時に所属していた部活動のOB会があり、多くの先輩達と会って話す機会がありました。皆それぞれに違った大学や会社に通っているのですが、話すうち

になんとなく旭川医大の先輩達と話している時とは雰囲気が違うということが気になりました。当然といえば当然の事ですが、旭川医大に通っているのは皆医者になる人ばかりです。そのせいか、人体に関することや、医学的な内容の話を多くします。はじめはとまどっていましたが、たった半年しかその中で生活していないのに次第に慣れ、今では反対に医大生以外の人と話をした時に話題の違いを感じるまでになっている自分に驚きました。そして、医学の単科大学という特別な環境の中で、外部の人とあまり接する機会のないまま6年間生活したなら、どんな人間になってしまうのだろうと、少しぞっとしました。将来接することになる患者さんは、いろいろな環境の中で生活しているのですから、今から様々な人に出会い、その人の立場になって考えられる人間にならなければならないと思います。生意気なことを書いてしまいましたが、こういう事に気がつけるのは医大に入りたての今しかないと思います。医者への道を一步ふみ出す時に、誰もが自分の理想の医師像を胸に抱いたはずですが、実際に医学を学ぶうちにだんだんと失われていくものがたくさんあると思います。私はこれからの医大での長い生活の中で、つらい受験勉強中の私を支えた理想の医師像への憧れを常に忘れずにいたいと思います。



第17回医大祭終わる

テーマ

「起死回生」



第17回医大祭が去る6月13日(木)から16日(日)までの4日間、開催された。

今年のテーマは「起死回生」であり、文字どおり今後の医大祭の存続を賭けた実行委員会のネーミングである。

13日のスポーツ大会に始まり、14日の仮装行列(仮装PR隊?)、前夜祭、15・16日に一般公開された医学展、講演会等盛りだくさんの企画が実施された。

一般市民も多数入場し、好評のなか無事終了した。

(学生課)



「手探り」からの脱出 「起死回生」は成功したか

第17回大学祭実行委員会委員長 薄井 広樹

というわけで、私が「かぐらおか」史上最低レベルの文を書く男として一部に有名な学祭委員長の薄井である。

医大祭が終わって2ヶ月。今は夏休みの真っ盛りであり、学祭当時はあれほど混雑していた第1セミナー室前も今では閑散としている。時の流れは疾風のごとく速い。その昔、古戦場で「夏草や強者どもが夢のあと」と詠んだ俳人がいたが、まさにそういう状況なのである。

「セミヤ、学祭委員が夢のあと。うむうむ。

くだらない話はこのぐらにして、本題に移ろう。

今年の医大祭のテーマは、御存知の通り、「起死回生」であった。このテーマに則り、人集めと運営組織の再構築を行ない、委員会主催による企画をいくつか立てて、低迷している医大祭の、文字通り「起死回生」を狙う……という話は、前号の「かぐらおか」に書いた。また、「実際フタを開けてみないと、どういうものになるか分からない」という話も、書いた。

さて、フタを開けてみて、どうだったか。

手前ミソで恐縮ではあるが、委員長としては、まあまあ「成功」、と呼んでいいだけのものはあったのではないか、と思う。

今回、一番大きかったのは、医大祭がマスコミ(北海道新聞)に取り上げられたことだと思う。

それにしてもマスコミの力つてのは凄い。金子先生の講演会にしても、演者の金子先生が客を呼べる人材であったことはもちろんだが、それだけではあの学外から来た方の多さは説明できない。受付で直接話をした人の中にも、「新聞を読んで来た」という人の数はかなり多かったし。

あと、マスコミといえば、雨で流れた仮装行列の話。実は、本祭に来たお客さんから、「仮装行列雨で大変だったでしょう」とか「流れて残念だったね、見たかったのに」とか言われたのである。とにかく、完全実施できなかった企画がこんなに高い知名度を持っているとは……実に凄いのである。

あと、学年医学展の復活も見逃せないな。1年生と4年生であるが、1年生は「救急」に関して深く掘り下げてくれて(私にも勉強になりました)、かたや4年生は生化学や病理学の知識を総動員して、「遺伝病としてのガン」の実態を分かりやすく、かつマニアックに示してくれた。ともに、関係者の皆さんには本当に感謝している。

そして、これも復活の前夜祭と初挑戦の早食い。どちらも大盛況であった(特に早食いは雨の中で大変だったねえ)。

まあ、あとは例年通り。文化系で旅鉄研が初参加にしてはがんばっていたな、ということ、体育系では教室増設で場所が変更になったバドミントン部が御苦労様だったな、というところである(どっちも玄関前だから、そういう意味では良かったといえば良かったかな)。

というところで、来年への課題である。

方法論は間違っていないと思う。だから、来年もこの方向で進んでいけばいいのだろう。

ただ1つ。

委員長は、来年はちゃんと全体を仕切れる、押しの強い、ユースフルな人にしようね(笑)。

おわり。

第38回 北海道地区大学体育大会

第38回北海道地区大学体育大会は、北海道大学が当番校となり、48校が参加し7月4日(木)～7日(日)の4日間、開催されました。

本学からは男子が10種目、女子が4種目に参加し、熱戦をくりひろげました。

参加種目の成績は次のとおりです。

(学生課)



| 種目 | 順位 | 優勝 | 準優勝 | 3位 | 旭医大 |
|----------|----|------|------|--------------|-------|
| 陸上競技 | 男 | 学院大 | 北海学園 | 酪農学園 | 11位 |
| | 女 | 道女短 | 札教大 | 学院大 | |
| 準硬式野球 | 男 | 学院大 | 札医大 | 駒沢教養 釧教大 | 1回戦 |
| 軟式庭球 | 男 | 学院大 | 北大 | 東日本 道工大 | 1回戦 |
| | 女 | 道女短 | 道都短大 | 静修短大 帯広大谷 | 1回戦 |
| 卓球 | 男 | 北海学園 | 道工大 | 専修短大 旭川大 | 予選リーグ |
| | 女 | 道女短 | 北大 | 栄養短大 札医短大 | 予選リーグ |
| バレーボール | 男 | 道都大 | 北大 | 室工大 旭教大 | 2回戦 |
| バドミントン | 男 | 北海学園 | 室工大 | 学院大 | 1回戦 |
| サッカー | 男 | 学院大 | 岩教大 | 専修短大 旭教大 | 1回戦 |
| バスケットボール | 男 | 学院大 | 釧教大 | 道都大 旭教大 | 2回戦 |
| | 女 | 道女短 | 札教大 | 釧教大 北大 | 2回戦 |
| 剣道 | 男 | 学園北見 | 道工大 | 専修短大 北大 | 予選リーグ |
| 弓道 | 男 | 樽商大 | 北海学園 | 北大 | |
| | 女 | 学院大 | 北大 | 藤女子大 | |
| ハンドボール | 男 | 北海学園 | 北大 | 函教大 | 予選リーグ |
| 総合 | 男 | 学院大 | 北海学園 | 北大 | 14位 |
| | 女 | 道女短 | 北大 | 静修短大 | 13位 |

第34回 東日本医科学生総合体育大会(夏季)

第34回東日本医科学生総合体育大会(夏季大会)は、東京慈恵会医科大学の主管で7月21日(日)～8月11日(日)まで、35校が参加し東京都を中心に各競技が行なわれました。

本学からは男女併せて23種目に参加、バスケットボール男子が準優勝、硬式庭球男子が3位に入賞を果たしました。また個人でも水泳で神藤巳佳が50m・100mに優勝、弓道で北飛鳥が優勝、陸上でも3種目に大会新を出すなど好成績を収めました。

参加種目の成績は次のとおりです。(学生課)

| 種目 | 順位 | 優勝 | 準優勝 | 3位 | 旭医大 |
|----------|----|----|-----|----------|-----------------|
| 陸上競技 | 男 | 慶応 | 福島 | 東北 | 5位 |
| | 女 | 新潟 | 東女 | 独協 | |
| 準硬式野球 | 男 | 東北 | 北大 | 山形 | 2回戦 |
| 硬式庭球 | 男 | 自治 | 千葉 | 旭医 | 3位 |
| | 女 | 信州 | 東女 | 群馬 | 2回戦 |
| 軟式庭球 | 男 | 群馬 | 北大 | 岩手 | 予選リーグ |
| | 女 | 昭和 | 千葉 | 山形 | 決勝トーナメント 2回戦 |
| 卓球 | 男 | 福島 | 新潟 | 東北 | ベスト16 |
| | 女 | 東女 | 山形 | 千葉 | ベスト8 |
| バレーボール | 男 | 自治 | | 北大 | ベスト8 |
| | 女 | 筑波 | 慈恵 | 山梨 | |
| バドミントン | 男 | 秋田 | 慈恵 | 筑波 東京 | 2回戦 |
| | 女 | 東京 | 山梨 | 岩手 山形 | 2回戦 |
| サッカー | 男 | 自治 | 慶応 | 群馬 | 2回戦 |
| バスケットボール | 男 | 東京 | 旭医 | 東北 | 準優勝 |
| | 女 | 東女 | 聖マ | 筑波 | 3回戦 |
| 柔道 | 男 | 秋田 | 福島 | 札山 幌形 | |
| 剣道 | 男 | 慈恵 | 昭和 | 自千 治葉 | |
| 弓道 | 男 | 慶応 | 日本 | 昭和 | 6位 |
| 空手道 | 男 | 自治 | 群馬 | 札幌 | |
| 水泳 | 男 | 東北 | 筑波 | 自治 | |
| | 女 | 山形 | 順天 | 秋田 | |
| ゴルフ | 男 | 昭和 | 北大 | 聖マ | |
| 総合 | 男 | 自治 | 山形 | 慈恵 | 17位 |

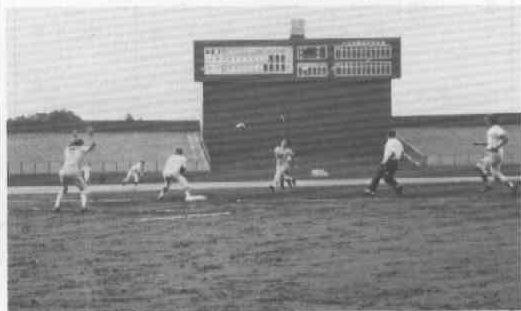
【個人】

| | | | | |
|-------|---------|----|-------------|-----|
| 陸上 男子 | 400M | 1位 | 加藤弘明 | 大会新 |
| | 800M | 1位 | 浅野克則 | |
| | 400MH | 1位 | 加藤弘明 | 大会新 |
| | 4×400MR | 2位 | 浅野・小林・穴倉・加藤 | 大会新 |
| 走高跳 | | 3位 | 城田 誠 | |
| | 女子 400M | 5位 | 敦賀利江 | |
| | ヤリ投 | 6位 | 古庄史枝 | |
| 弓道 男子 | | 5位 | 竹田貴弘 | |
| | | 7位 | 吉田正史 | |
| 女子 | | 優勝 | 北 飛鳥 | |
| | | | | |
| 水泳 女子 | 平泳 50M | 優勝 | 神藤巳佳 | |
| | 平泳100M | 優勝 | 神藤巳佳 | |
| | 200メドレー | 3位 | 由良智春 | |

全医体の成績結果

準硬式野球と男子バレーボールは昨年度東医体で優勝し、今年度の全医体の主管校となり旭川で競技が実施されました。また男子バスケットボールは今年度東医体で準優勝をし、全医体に駒を進めました。結果は次のとおり。

| | |
|------------|--------------------|
| 準硬式野球 | 準優勝 |
| | (8月22～23日 スタルヒン球場) |
| 男子バレーボール | 3位 |
| | (8月8日 大雪アリーナ) |
| 男子バスケットボール | 7位 |
| | (8月13日 杏林大学体育館) |



課外活動短信

| | | | |
|---------------------|---------|---------|--|
| サイクリング・クラブ「ちゃりんこの会」 | | | |
| 道新杯ロードレース大会 | 5月19日 | 12km | |
| 4位 木村圭介 | 5位 福永亮朗 | 6位 横浜史郎 | |
| 第3回旭川センチュリーラン | 6月23日 | 160km | |
| 1位 横浜史郎 | | | |
| 第12回道北ロードレース大会 | 7月7日 | 82km | |
| 5位 横浜史郎 | | | |
| 陸上 医歯薬獣医大会 | 8月18日 | 青森陸上競技場 | |
| 男子 400M | 1位 | 加藤弘明 | |
| 800M | 1位 | 浅野克則 | |
| 400MH | 1位 | 加藤弘明 | |

納付済みの授業料の還付について

授業料の額及び徴収方法については、平成2年11月1日文部省令第28号により「国立の学校における授業料その他の費用に関する省令」が改正され、金額の改定とともに、申出があった場合には、前期分授業料徴収の際、後期分授業料も併せて徴収できることとなり、学則第29条の改正が行われました。(「学生生活のしおり」P.70参照)

なおこの改正に伴い、平成3年3月15日付けで文部省高等教育局長から「国立学校の授業料等免除及び徴収猶予取扱要領」の一部が改正された旨通知があり、前期分授業料徴収の際後期分授業料を併せて納付した者が、後期分授業料の徴収時期前に休学又は退学した場合には、後期分の授業料に相当する額を還付することとなりました。

還付に係る学則第35条の改正は平成3年4月17日に行われておりますが、「学生生活のしおり」には収録されていませんので、お知らせいたします。

(学生課)

学年担当教官の変更について

新学長・新副学長の就任により、学年担当教官が一部変更になりましたのでお知らせいたします。

| | |
|-----------|-------|
| 第3学年 学年担当 | 安孫子 保 |
| 第5学年 学年担当 | 牧野 勲 |

特別実習「救急蘇生」実施される

去る5月8日(水)午後1時10分から第7講義室及び武道場において、旭川赤十字病院麻酔科部長 表哲夫氏を講師に迎えて、特別実習「救急蘇生」が実施されました。本特別実習は安孫子副学長の尽力により第1学年学生を主たる対象として企画されたものですが、他の学年の学生26人を含め111人が受講しました。当日は第7講義室におけるビデオ学習の後、武道場において14体の蘇生法教育用人体モデルを使ってグループ毎に救急蘇生の実習を行いました。

この実習の受講者は、医科大学に入学したことを実感として受けとめたようでした。(学生課)



卒業生の動向

去る3月25日(月)に本学を卒業した121名の勤務(連絡)先は次のとおりです。

また、4月に行われた第85回医師国家試験には本学卒業生137名が受験し、121名(平成2年度卒業生112名)が合格しました。(学生課)

| 氏 | 名 | 勤務(連絡)先 |
|---|---|---------|
|---|---|---------|

安全運転の徹底について

交通事故の防止については折りにふれ注意を喚起しているにもかかわらず、著しい速度違反を犯し取締りを受ける学生が後を絶ちません。

道内における交通死亡事故は「速度の超過」が大きな原因となっており、将来国民の命を預かる立場にある医学生が交通事故で死亡したり、加害者にならないよう、充分安全運転の徹底に心掛けて下さい。

(学生課)



教官の異動

(辞職)

江端 英隆 3. 6. 16 外科学第二講座・助教授
田村 正秀 3. 6. 30 外科学第一講座・助教授

(任期満了退職)

下田 品久 3. 6. 30 学長
鮫島 夏樹 3. 7. 31 副学長

(副学長任期満了)

安孫子 保 3. 8. 1 薬理学講座・教授

(昇任)

清水 哲也 3. 7. 1 学長
葛西 真一 3. 7. 16 外科学第二講座・助教授
東 匡伸 3. 8. 1 副学長
水戸 勉郎 3. 8. 1 副学長



窓外

千葉 茂

記憶あれこれ

今年の夏、映画「おもひでぽろぽろ」をみた。ご覧になった方も多いと思う。宮崎駿プロデューサー・高畑勲監督のアニメーション作品で、27歳の女性が小学校5年生の時の自分を思い出しながら旅をする。その旅の中で、主人公の女性が自分自身を見つめ直していく。映画をみている者が、自然に自分の小学校5年生前後の時期、すなわち、少年・少女時代を振り返ってしまう不思議な映画である。

考えてみると、我々が覚えている自分自身の生活史とはどのような記憶であろうか。生後少なくとも3年間くらいの記憶は多くの人が持ち合わせていない(幼年健忘)。したがって、それ以後の生活史を記憶していることになるが、それでは3歳から現在までの生活史について語れと言われても、あまり多くのことを思い出せずに困惑してしまう。しかし、以前住んでいた土地を久しぶりに訪れた時やなつかしい友人に会った時には、我々はさまざまなエピソードや場面が次々に蘇ってくることに驚きを感じることもある。

教科書に従えば、記憶とは、過去に印象づけられた情報、知覚、その他の経験を、後に必要に応じて誤りなく想起する精神機能である。これまでに、記憶はさまざまなモデル(例えば、多重一貯蔵モデル)によって理論化されてきたが、記憶を純粹に生物学的用語で説明することは現在もできていない。ヒトでは、記憶機能に重要な

役割を果たすと考えられる脳部位が広く存在している(海馬、乳頭体、視床背内側核、連合野など)。記憶は、これらの脳部位内の神経回路や脳部位どうしを結ぶ複雑な神経回路の中に、シナプス結合の変化として読み込まれ、保持されると推定されている。自分に関わる膨大な記憶もまた、このネットワークの中に潜んでおり、何かのきっかけで意識に上ってくるのであろう。

ところで、精神的な原因で、自分に関する一切の記憶を失ってしまうことがある。全生活史健忘(全般健忘)という。心理機制として、不快な情動体験に対する意識的または無意識的な抑圧が想定されている。本州に在住する男子大学生Aが、失恋の傷を癒すための旅行に出かけたが、旭川市の近くでこの健忘状態に陥り、数日後に某精神科を受診した。受診時、「眼りから覚めたら、自分はバスに乗っていた。自分についての記憶はそのあとのものしかない。」と述べ、自分の名前も、年齢も、住所もわからない状態であったが、後日、記憶は回復した。Aの旅行の目的地は、うまくできた話と思われるかもしれないが、愛別であった。全生活史健忘は特殊な病態であるが、記憶の想起のされ方が心理状態によって著しく影響される場合があることを如実に示している。

自分に関する記憶には、客観的な事実とかなり異なる部分があると私は考えている。記憶される際にも、また、それが想起される際にも、その時の個人が置かれた状況や心理状態などのさまざまな要因の修飾を受ける可能性があるし、いったん貯蔵された記憶も、時間の経過とともに質的に変化しないとは言いきれない。故ライシャワー氏(元駐日大使)は、その自伝のなかで、自己の記憶がいかにあやふやなものであるかを実例をあげて述べている。記憶というものは、ある程度の曖昧さを備えたものなのである。しかし、この曖昧さがあつたとしても、記憶が個人にとって大切な財産であることにはかわりはない。

(精神医学講座 講師)